

カラカラ鳴る海

小川未明

青空文庫

この港は山の陰になつていましたから、穏やかな、まことにいい港でありました。平常はもとより、たとえ天気がよくないような日であつても、この港の中だけはあまり波も高く立たず、ここにさえ逃れば安心といふので、たくさんな船がみんなこの港の内に集まつてきたのであります。

ある日のこと、沖の方がたいへんに荒れたことがありました。沖を航海していたいろいろな船は、みんなこの港を目がけていっしょうけんめいにはいつてきました。港の内は諸国の船々でいっぱいになりました。

赤い船や、白い船や、黒い船や檣の三本あるもの、また二本あ

るもの、長い船やあまり長くないのや、いろいろありました。また旗を立てている船にも、三角の旗や四角の旗や、いくつも旗を立てているのや、ただ一つぎりのやさまざまでありました。また煙突から黒い煙を上げているのもあれば帆船船もありまして、それは見るだけでも海の上はにぎやかでありました。

港の人々はみんな海岸に出てながめていました。その中には老人もあれば子供もありました。若者もあれば娘もありました。また子供を負っている母親もあれば、またお嫁さんになったばかりの、髪を美しく結った若い女もありました。

老人はみんなを振り返りながら、

「私は、もう幾十年の昔から、この港の内で朝晩送ってきたも

のだ。この港みなとにはいつてくるような船ふねで知らない船ふねは一つもない。
 たいていの船ふねはみな見覚えみおぼがあるばかりでなしに、私わたしよりみんな
 ずつと船ふねの年としも若いわかものばかりだ。古ふるくて今いまから二十年ねんと上うえに出
 る船ふねはあるまい。私わたしの若わかかつたころの船ふねは、もはやたいてい年としを
 取とつてしまつて、長ながい航海こうかいの役やくにはたたなくなつたとみえる。
 そしていつとなしにこの港みなとへもその姿すがたを見せなくなつてしまつた。
 ごく若いわかのはやつと半はん年としから一年ねん、二年ねんというようなのが、こ
 の中うちにまじつてゐる。この港みなとへはいつてくるほどの船ふねで私わたしの顔かおを
 知らないものはない。みんなきつと一度どは私わたしにあいさつをして水みず
 をいれるなり石炭せきたんを積つむなりするにきまつてゐる。私わたしはまたそ
 の船ふねをよく覚えおぼえている。この船ふねはどこくにの船ふねだかということ

よく知っている。沖が荒れているので、このとおりみんなこの港にはいつてきたのだ。おまえたちもなにかと、頼まれたりしんせつに世話をしやるがいい。お天気になるまでは、みんなこの港の内に滞在していることだろうから……。」と、老人はいいました。

若者たちのうちでは、朝のうちから舢舨に乗って港の内をこぎまわっていました。なにか変わったことがないか？ こう知らない他国の船がたくさん集まっているのだから、まちがいが起こってはならないというのでありました。

若者たちは、たくさんな船の間をこぎまわっていますと、この港へ上げるために小舟へ荷をおろしている船もありました。ま

たこの港みなとから貨物かもつを積つんでゆくために、小舟こぶねで荷にを運はこんでいる船ふねもありました。また船ふねの甲板かんぱんを洗あらっているのや、港みなとの町まちへ遊あそびにゆこうとして舳はしけをこぎはじめているのや、それは一様ようでなかつたのでした。

しかしどの船ふねもなんとなく活気かつきづいていました。天気てんきになるのを待まつて、また長い波路なみなみじを切きつて出でかけようとするので、その前まえにこれを機会きかいに骨休ほねやすみをしているように見みられました。ある船ふねからは、勇まいさしい歌うたの声こえなどがきこえたのでした。

このとき、これらのたくさんな船ふねの中なかにまじつて、一その見みなれない船ふねが停てい泊はくしていました。その船ふねには、一つの旗はたも立たつていなければ、乗のり込こんでいる人ひとたちの姿すがたすら、甲板かんぱんにはあら

われていなかったのです。そして見るからに、なんとなく陰気な船であつて、その船の名さえ書いてなければ、もとよりどこの国の船ともわからなかつたのでありました。

「俺たちはいままでこんな船を一度も見ることがない、どこの国の船だろうな。」と、若者たちは目をみはりました。

彼らはこの陰気な、国籍もわからない船の近くに停泊している他の船がありましたから、ようすをきこうとその船へ近づいて、乗組人に、「あの船はどこか知らないか。」と、港のわかもの若者たちはたずねました。すると、その船の乗組員らは、

「じつは私たちもあの船を見ておかしな船だと思つていたのです。なんでも昨夜、真夜中ごろ、どこからか石炭を運んできて、積

み込んだようなけはいでした。そして乗っている人たちは、みな顔をおついで目ばかり出しているのです、こちらの国の船とも外国の船とも見当がつかないのです。」と答えました。

「ますます、不思議だ！」と、若者たちはいつて、さつそく艇を陸へこぎつけると、老人のもとへやってきました。老人ならたいていの船のことも知っていますからです。

ちようど老人は、そこに立っているみんなを振り向きながら自慢話をしていたときでありました。

若者たちは老人のそばにやってきて、不思議な身柄のわからない船が、港の内にはいつていることを告げたのであります。

「どこにその船はいる？」

と老人ろうじんはいって、沖おきの方ほうを見みやりました。

「あの赤い船あか ふねのうしろにいる、あまり大おおきくない黒い船くろ ふねです。」
と、若者わかものは指ゆびさしました。

老人ろうじんは黙だまってうなずきました。

「船ふねの名なも書かいてなければ、またどこの国くにの船ふねか旗はたも立たてておりません……。」「と、若者わかものの一人ひとりがいうと、他の一人ひとりは、

「なんでも乗組人のりくみは、顔かおを隠かくして目めばかり出だしているといひます。」「といひました。

また、そのそばに立たっていた他の一人ひとりの男おとこは、

「なんでも夜中よなかに石炭せきたんをどこからか運はこんできて船ふねの中なかに積つみ込んだともいうことです……。」「といひました。

この話をきいた人々は、いずれも首をのぼして、その船のい
 る方を見ました。そして、

「見える、見える、なるほど怪しげな船があすこに泊まっている
 !」と、口々にいっていました。

老人は独りおちつきながら、

「天気がよくなったら、明日にもどこかへ行ってしまおうだろう。」
 と答えました。

すると、血気にはやる若者たちは、そんなのんきなことをい
 ってはいられんというふうで、

「海賊船かもわからないものを、このままに黙ってはいられな
 い。すぐに届け出なければ……。」と、一人がいいました。

また、他の一人は、

「この港みなとのものが知しっていて、黙だまっていたということがわかれば、こちらの手落ておちになるのだから、どうしてもこのままにしておくことができない。」といいました。

見みている人々ひとびとの中なかからも、「このことを港みなとじゅうのものに知しらして、あの船ふねを押おさえてしまったほうがいい。」といったものもありました。

けれど老ろうじん人一人ひとりだけは、やはり黙だまっていました。

「おまえさんは目めが悪わるくなってあの船ふねが見みえないからだろう。」と、中なかには皮肉ひにくをいって、いままで自慢じまんをしていた老ろうじん人の鼻はなを折おつてやろうと思おもったものもありました。

「なに、私わたしにあの船ふねが見えないことがあるもんか。あの船ふねは昨日きのうの晩方ばんがた、あらしの最さい中ちゆうにどこからかこの港みなとの内に逃にげてきたのだ。私わたしはそのときちやんと知しつて、身柄みがらのわからない……今いままでに、見みたことのない船ふねだなどは思おもっていた。」と、老人ろうじんは答こたえました。

「そんならなぜ、いままで黙だまっておいたのですか？」と、艇はしけから上あがってきた、若者わかものの一人ひとりがたずねました。

老人ろうじんはうなずいて、

「あらしのために困こまって逃にげてきたのだ。天気てんきになればどこへかいつてしまふと思おもつて、黙だまっていたんだ。」といいました。

若者わかものたちは老人ろうじんにかまわず、その船ふねを処分しよぶんすることにし

ました。中にはこの船を取り押さえてしまおうというもの、届け
 出たほうがいいというもの、またはすぐにこの港から追いたてて
 しまったほうがいいというもので議論はもめたのでした。

しかし、けつきよく、すぐに追いたてるということにきまつて、
 彼らはふたたび艇に乗つて出かけました。手に手に万一の場合を
 慮かつて、短銃や猟銃などを携帯しながら、この怪し
 げな船を目ざしてこいでゆきました。

若者たちは怪しげな船のそばにゆくと、大きな声でどなりま
 した。しばらくするとはたして、顔を隠して目ばかり出した男が、
 首を出しました。若者たちはすぐにこの港から出てゆくように、
 もし聞かなければ、その船を取り押さえるなりその筋へ訴え出る

なり、するからとといったのであります。

すると、その怪しげな船の中から幾つも頭を出しました。どの首も目ばかり出して黒い布で包んでいきます。そしてその黒い頭をぺこぺこ下げて、どうか今夜だけでも一晩ここに泊めておいてくれと頼みました。しかし若者たちは承知をしなかつたのです。

「この港には規則があるのだから、すぐ出てゆかなければ処分をする……。」といいました。

黒い頭が、みんな船の中に引込んでしまいました。それからまもなく、その陰気な船は動き出して、影のようにこの港の内から、外海へ出ていってしまったのであります。

この怪しげな船の姿が見えなくなつてしまつたとき、若者たちは舢をこいで陸へ上がつてきました。そして老人に向かつて、「みんなが頭をぺこぺこ下げて、今晚だけでも一晩泊めておいてくれいと頼みました。」と、その有り様を話しました。

この人のよさそうな老人は、やはりうなずきながら、そうだろうといわぬばかりに、

「今夜は、昨夜よりも大きいあらしになりそうだ……。いま、あの船をこの港から立たせるのは、みんなを殺してしまうようなものだからな。」と、深いため息をもらして答えました。

人々が、海岸から散じてしまつて夜になりかけたころでした。ほんとうに海の上はひじょうなあらしになつたのであります。

それは老人のいったとおりでした。若者たちは老人の言葉を思い出し、またあの船を無理に追いたてたことなどを思い出して、さすがにいい気持ちはいしませんでした。

若者たちはめいめい心ががめて、一夜じゅうよく眠ることができなかつたのです。

あくる日の朝になって、あらしが幾分かおさまったころ、昨夜この港へ入ってきた船があるということをしきましたので、若者たちはさつそく小舟に乗って、その船のところへ出かけてゆきました。その船はよくこの港へやってくる船でありました。

「あなたがたは海外の方で、どこかほかの船におあいになりませんでしたか？」と、若者たちはたずねました。すると、昨夜

はいつてきたという船ふねの中から、

「そんなに大おおきくもなかつたが、黒くろい船ふねで一なみそう浪なみにもまれて、

いまにも沈しずみかかつていたのを見みました。けれど暗あん夜やのことで、

それにあの大暴風雨だいぼうふううではどうすることもできなかつた。ただ、

不思議ふしぎなのは、その船ふねはこの港みなとに入はいろうとはせずに、あのあらし

の中なかを沖おきへ沖おきへといつたのはどうしたことかと、みんなが不思議ふしぎ

がつていたのだ。いまごろはきつとどこかで沈しずんでしまったであ

ろう……。」「といったものがありました。

若わか者ものたちは、まさしくあの船ふねのことであると思おもいました。か

わいそうなことをしたと感かんじられたのでした。しかし、いまとな

つてはどうすることもできませんでした。

二日めです。暴風が静まってしまふと、港じゆうに群がって
 いた船たちは、いつのまにか、思い思いにいずこへとなく出てい
 ってしまいました。人々もあらしのことを忘れてしまい、海の
 上は平穩にさながら鏡のように輝いていました。
 ある日のこと、白い船が一そうこの港の中にはいつてきました。
 そして港の内に停泊すると、小舟に幾つも箱を積んで陸をさし
 てこいできました。

「私たちは南の国から、はじめてみかんを積んでこの港にはいつ
 てきたものです。いくらでもいいから今後の取引のために、安
 くまけますからこのみかんを買ってください。」といいました。
 港の人たちはそこに集まってきました。そして、「どんなみか

んだか箱はこのふたを取とつて見みせよ。「といいました。船ふねのものは一
つはこの箱を砕くだいて内うちを見みせました。するとみごとなみかんがいつぱ
い詰つまっています。

そこで取とり引ひきは、ぞうさなくきまっています。

陸りくの方ほうからも船はしを出だして、白しろい船ふねの積つんできたみかんの箱はこを町
へと運はこびました。やっとその荷にを運はこび終おわると、

「さようなら。」といって、白しろい船ふねはこの港みなとから出でていっ
てしま

いました。
「いいみかんをたんとまあ、安やすく買かつたものだ。これことしで今年ことしはこ
の町まちは大おおもうけをするだろう。」と、みなは口くち々くちにいってうれ
しかりました。

「なんという名まえの船だったかな、だれか憶えていたであろう。」と、一人がいました。

「さあ、なんといつたかな？」と、そこに集まった問屋のものは、たがいに顔を見合いました。

すると、一人の若者が、

「そのことだ！俺は、いおうと思つて忘れていた。あの白い船にはなんにも名まえが書いてなかつたようだ。」といいました。

「まるできつねにつままれたような話だ。」と、みんなは口々にいつて、その日は暮れてしまいました。

翌日、箱の中のみかんを取り出そうとしますと、どの箱の中からも、出てくるのはみかんでなくて、円い石塊ばかりであり

ました。みんなはどんなにびつくりしましたでしょう。

「みかんにしては重い箱だと思つていた。」といったものもありました。

そしてそのとき、全部の箱をあらためて見なかつたのを悔いたのでありました。みんなは悪い船にだまされたといつて、その黒い石をすっかり海の中に投げ捨ててしまいました。

それから後のことであります。あらしがきたときに、この港のものは、みんなが震え上がらなければなりませんでした。なぜと
いうに、いつか海の中へ捨てた黒い石が、すっかり生きてでもい
るようにカラカラカラツと鳴つて、波の押し寄せるたびに岸へ打
ち上げられて、また波の退くたびに海の底へもぐり込むように隠

れたからでした。そしてあらしのやむまでは、カラ、カラ、カラ、カラ
ツといつて、昼ひるとなく夜よるとなく、黒い石くろいしが鳴なつてやまなかつたの
であります。

平常ふだんは静しずかな山蔭やまかげの港みなとも、あらしの日ひにはじつに気味悪きみわるい港みなと
でありました。船ふなの乗りらはこの石いしの音おとをきくと、ひやりと体からだじゆ
うが寒さむくなるといいます。そしてこの港みなとはいつしか石いしばかりにな
つて、船ふねのはいれないまになつてしまいました。いまだにあら
しの日ひには、その海うみが冷あざわら笑なうように鳴なるのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

※表題は底本では、「カラカラ鳴《な》る海《うみ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

カラカラ鳴る海

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>